

学力向上を支える社会科の評価

1. 取組の実際

教師の評価は自分を客観的に見る機会を与える。特に、評定は自分を見つめる絶対的なものとしてとらえている。しかし、それだけでは努力しても伸びない評定の前では、やる気をそいでいる原因にもなっている。実は、教師の評価はそうした評定だけでなく、授業中でおこなうアドバイスや作品に加えるコメント、できなかったところを確認するふり返しシートなど「指導と評価の一体化」を通じて子どもの意欲を引き出すことが大切である。

また、子どもが意欲を出すきっかけは、教師の評価だけにどどまるものではない。子どもどうしから受ける評価も意欲を引き出す。こうした子どもどうしの評価は、他者の優れた意見や作品に触れることができるし、自分を客観的に見る土台となる。

そして、このような外側からの評価の上に立って、自分で自分を客観的に見つめ、発展的に改善しようとする力としての自己評価力が大切であると考えている。

2. 成果

教師が一人ひとりの子どもをよく見取り、その子どもの声に応えるように適切に支援していくように意識し、授業内においても生徒の個々に応じた「指導と評価」をくり返すことにより生徒の学習意欲の向上につながってきている。

また、お互いのよい部分を認め合おうとする前向きな相互評価をくり返しおこなうことにより、相互に評価する力が高まるだけでなく前向きに学習する姿勢を育てることができた。そして、このような外からの評価の上に立って本人自身が自分の学習の状態を的確に前向きに認識する力を徐々につけてきていると考える。

具体的には、今まで学習にさほど前向きに取り組めていなかった子どもが、調べ学習の子どもたちどうしの評価の中で「絵がうまい・内容がわかりやすくまとまっている」といった多くのコメントをもらうことにより、自信を持ち始めてきている子どももいる。また、毎時間の授業後、その時間の学習内容や疑問点などをきちんと整理させて書いていく中で、次への自分の課題がわかり学習に前向きに取り組めてきた子どもも出てきている。

3. 課題

教師・生徒ともに評定を意識しすぎている傾向がある。評価は、学習に対する意欲を高め、学力向上に結びついていくものでなくてはならない。こうした評価の意味をもう一度教師・生徒とも再確認していく必要がある。教師による評価は、子ども一人ひとりがその後の学習活動に意欲を持って取り組めるものであるために、評価についての適切な時期や内容を今後も研究していかなくてはならないと感じている。

自己評価は学習によく取り組む子どもほど自らを厳しく評価する傾向を持っている。それは、取り組むべき課題がわかっているため、設定している目標が高くなるからである。取り組まない子どもは目標がさほど高くないため、甘い評価をする傾向がある。そのため子どもが適切に自己評価をおこない、それを生かして育っていくために教師がどんなことができるのか支援のあり方を考えていく必要がある。